

モロッコ (CN) の旅 3

JH3AEF 東條純一

モロッコといえばカサブランカ、その名は映画の題名にもなりあまりにも有名である。そのためか国名はさておき首都カサブランカという感覚を持つ人は意外に多い。私もその一人であったのだが、首都は聞き慣れないラバトである。カサブランカは古くから交易、商業の中心地として開けた都市だそうで、マラケッシュ、ラバト、フェズなどの都市のほうが歴史的遺産に富むといわれている。

そのマラケッシュ郊外には夕刻早くに到着、街道筋とは一変、整然と街路樹の植わった新市街を通りぬけ、人いきれとバイクと車でごったがえす旧市街地からほど近いホテルに到着した。

この国の都市は多くが新市街と旧市街に分かれている。歴史とともに発展した旧市街地は、あまりにも永きにわたり徐々に、複雑に変革を遂げたため、その上に近代的な都市を建設することは不可能だったのであろう。古くから拡張に拡張を続けた旧市街はどここの都市でもメジナと呼ばれ、外敵の攻撃から街を守るため例外なく高い壁に取り囲まれている。その壁は規模こそ大きい全くの土塙で、芯になる木材がいたるところで突き出ている。お城の石垣の上に整然と廻らされた真っ白な土壁とは程遠いものであった。その中に王宮もモスクも学校も市場も居住区もあるのだから、その複雑さは容易に想像もできようというものだ。まるできたない風呂敷に、がらくたを放り込んでくっつけたようなものは、あまりにも尊厳を損ねる表現であろうか。宿をとった我々は、早めの夕食をすませ、夜のメジナ見学に出かけることとあいなった。手配のガイドはスウェーデン人、相当年配とお見受けしたが各国で民族の風習や習慣を研究し、短期間ではあるが東京の大学にも入りしたことあるという大女であった。日本人は英語やで、それもslowlyにusing simple wordsやでの注文はしっかり解ってくれたようで助かった。メジナの中でもランクルの動ける所まではドライバー氏が送ってくれた。そこは最も複雑で混雑した市場(スーク)の入り口であった。通路はあくまでも狭く、所によっては人ど行き違うのも困難なところも少なくない。その上曲がり角が多い。勿論その昔、市街戦になったとき、敵の動き封じの目的があったとか。店々の壁は全て漆喰で、その上入り口には大きくて頑丈な鉄板の扉が取り付けられている。この扉たるや我々の感覚では町工場の入り口にあるような、すなわち背が高く色気がない、強度を増すために同じ鉄のかすがいの入ったあの鉄の扉である。ただ面白いことに、これまた鉄製のシンボルといおうか飾りといおうか、必ずと言って良いほど細工され小物が、左右対称に取り付けられているのだ。開店の時にはこの扉が左右に完全に開かれ中は意外と広い商店となっている。扉ごとに扱う商品は様々、じゅうたん、衣類、金属製の食器類、革製品、陶器等など。狭い入り組んだ路地を通過し、鉄製の扉の奥を覗くと目を見張るようなレストランであることもあった。

<夜のメジナ>



天井は高く壁は白く塗られ、かなりの数のテーブルが白いクロスで飾られ整然とセッティングされている。壁には特産のタペストリー、短剣、槍の類が飾られているところもあり、純EU調のところもあった。外の喧騒と人いきれからはまったく想像もつかない空間である。いったいどのような人達がここで食事をするのだろう。不思議な感覚であった。少し通路の幅が広がると羊を引いた人が、また、なぜか羊だけが私、行き先はわかっていますと言うような顔つきで一人歩きし、ロバに荷物を運ばせる人が、そしてバイクは肩を触れるようになりながら走りぬけて行き、ひと時も気を緩めることができない状態が続いた。



<色鮮やかなスパイス店> M氏撮影

ある所では、扉もなく、ほんの軒先で商売する店がどこまでも続き、どこが店の境界かも判らない所も少なくない。その店頭には色鮮やかな香辛料が大きな樽に頭を三角錐に整えられて並べられ、その鮮やかさに一瞬目を奪われた。この一角では主に生鮮食料、日用雑貨、陶器、衣類、ラジカセCDあらゆる生活必需物資が所狭しと並んでいた。鶴橋の国際商店街はこちらに比べればなかなか整然としていて立派なものという感じである。喧騒、雑踏、輻輳もここまで来れば世界遺産の価値となるらしい。1985年に早々と登録されているという絨緞を扱う店には大きな構えのものが多かった。

そのような店に足を踏み入れようものなら、なかなか出て来れないよとガイドのおば様に注意をされていたのではあったが、つい一人二人が足を踏み入れてしまっておおごとになった。とにかく壁には目も見張るような絨緞がところ狭しとつるされている。部屋の隅には彫り物を施した如何にも重厚な応接セットがおかれている。お客はここに導かれ丁寧に座らされる。早速CN特有のミントティー、バラバラと数人のターバンに現地衣装の従業員が出てきて最敬礼、大きな部屋の三隅、四隅から絨緞を広げては、これはベルベル織りだの、染色はオアシスにある何かの花の染料だとか立ち上がる暇をあたえない。「あいつ何しとるんや」と様子を見に入った夫婦がまた椅子に座らされて「ミラ取りがミラに」。結局全員が次々部屋の周りに腰を下ろす羽目になってしまった。奥の部屋にはまだまだ高級なものも、障子を大きく開くと、なるほどびっくりするような大部屋が現れ、絨緞だけかと思いきや金、錫、目もくらむような装飾品までもが並べられた空間が現れた。絨緞の説明を聞くというよりは怪訝な面持ちの我々に、日本人の住所氏名がずらりと並んだ配達録らしきものを持ってきて「絶対大丈夫、信用できます」と言わんばかり。とにかく開放されるのに相当な苦勞と時間を要した。なかなか出て来なかったわりには「やっぱりペルシャ絨緞のほうがきめ細かくて肌触りが良いわ、、、」とか。オパタリアン達の感想は辛口でほっとした。

このスークに接してジャマ、エル、フェナ広場が広がる。石畳の広場だったように記憶するが確かめたものではない。広さも相当なもので天王寺公園の比ではなかったように感じた。広場の言葉どうい片隅には屋台が軒を連ねる一角があるが建物は一切無い。広場はその昔、公開処刑場として使われていた場所だそうだが、今はその面影は無い。屋台は当然飲み物や食べ物を扱っていて、土地の人は群がって飲んだり食ったりしていたが、我われは新鮮な果物のジュースを買うくらいがせきのやまであった。

砂漠に近い土地柄か、この広場では水を売り歩く商売が繁盛??していた。ただ、水を買って飲んでいる場面には不思議に出くわさなかった。というよりは、彼らの衣装が目を見張るものであった。ターバンは勿論、インドのサリーよりはもう少し衣服らしい衣をまとって、いずれも肌に密着するような衣服ではなく、一挙一動にフワフワ、ヒラヒラとゆとりある、あのアラブ特有の衣装である。しかし、この広場での衣装は格別であった。衣の色合い、腰に巻いたベルトの色合い、腰につるした剣、首にかけたジャラジャラの首飾り



<土壁>



<市街を外れると粗末な土レンガの家が並ぶ>

いかに写真写りを強烈にするかが強調された装飾である。カメラを向けるとこれ以上ないポーズをとってくれるが、水売りはそこそこで、写真のあとのチップが商売。と知ったのは、カメラをおさめてその後であった。10DH=120円ではどこまででもついてくる。仕方なくもう10DH渡しても、撮影前とは全く違った怖い顔つきでようやく離れて行った。

この広場は大道芸人のメッカとしても有名。民族衣装をまとうて歌と踊りを披露する一団をはじめ、あちこちに人垣ができ日付が変わっても延々と続くのだそう。メジナの中には幾つかのモスクがあったが、最も有名なのはベン、ユーセフモスク、明るいうちは鮮やかな緑に輝く角型のミナレット(塔)が目印となる。12世紀にスルタン(王)ベン、ユーセフにより建立された由緒あるモスクだそうだが、イスラム教徒以外は中に入れない。この王様、どつともなく偉大であつたらしく、あちこちの街でベン、ユーセフ通りにお目にかかった。また、同じメジナの中に同名のマドラサ(神学校)もあり、最近まで数百年にわたり実際に使われてきたのだと聞いて感激した。ユーセフはフセイン、モハマド、ハッサンなどと共に、この国、いやアラブの国々では由緒正しき名前であるらしい。旅行後、私のところに来たCNのカードを眺めていて、ユーセフのOPNAMEの記されたものがあり感激した。

夜が更けるにしたがってその威容を誇ったのは、ライトアップされたクドピアと呼ばれる100m近い高さのあるミナレットであった。四角い塔であり四面が異なったデザインを施されていると聞いたが、見て回る余裕はなかった。12世紀の建築といわれ、マラケッシュの代表的建造物と聞いた。今ひとつ、まだ日の明るい最初に見たのがバイア宮殿。メジナの中にあるがここだけは緑の庭園に囲まれた別世界である。サッカーグラウンドも入ろうかという巨大な中庭、床は大理石張り、中央にはこじんまりとした噴水がしつらえられている。

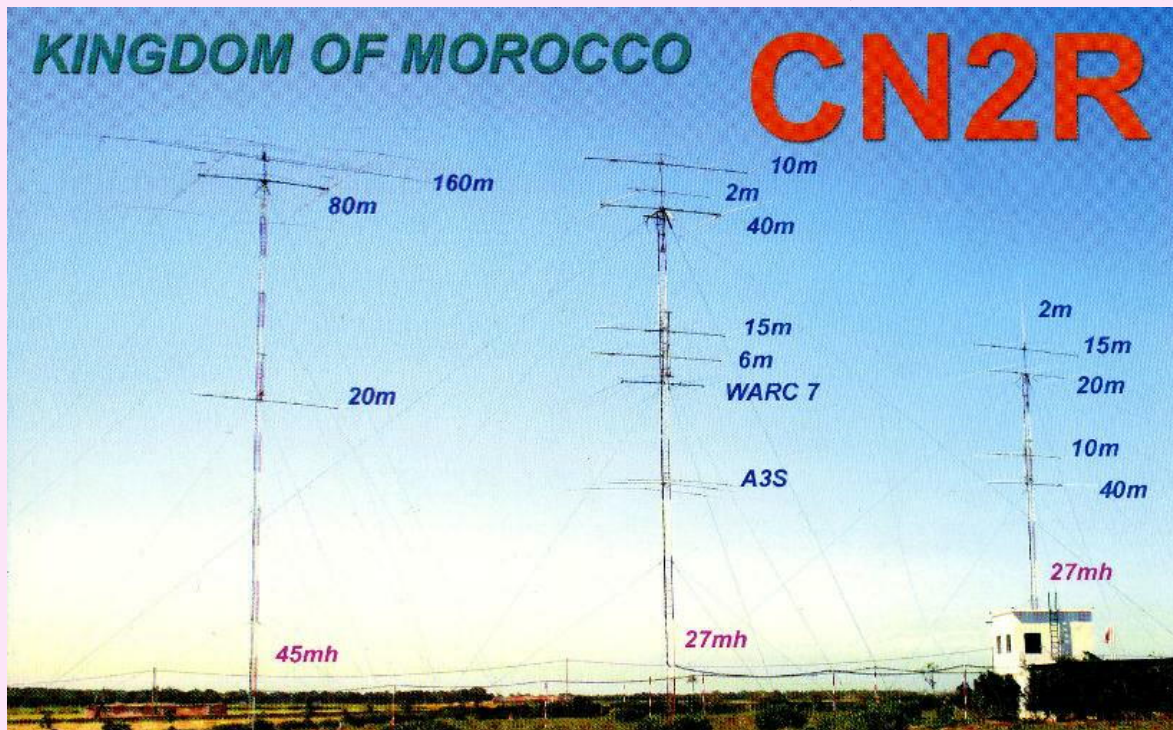
中庭の周囲、正面に大きな屋敷を配し、残り三面には対照的に小部屋が配されていた。部屋ベヤの壁は色鮮やかなタイルやモザイクタイルで彩られ、欄間にはモロッコ産の杉が見事な彫刻を施され何れも対象に配置、装飾されていた。

ここは王宮ではなく、王の4人のお妃、そしてそのお子たちが暮らした宮殿なのだそうで、王は別に王宮をお持ちだったとか。そして必要などきだけ、こちらにおなりになったのだとか。周りに配された小部屋は側女たちの居室であったという

ホテルに帰ってシャワーもそこそこに、ヨイトコショと横になった向こうでは、うちのお妃ならぬカーチャンが早くも高艷。明日はまた、どのようなexitingな一日になるのやら。



< 立ち寄った家の主はミントティーで歓迎、腰には刀、これは羊をさばくのを使う >



大阪国際交流センターラジオクラブ

大阪市ーサンフランシスコ市 姉妹都市
50周年記念局開局

8N30SA

8J3SF